

御子イエスの逆説的栄光

(ヨハネ二・二〇～二六)

春樹ではなくディラン。『追憶のハ
イウェイ六一』と『ザ・ベスト・オブ・
ボブ・ディラン』を愛聴した大学時代
を過ごしていた私はテレビに映る、今
やノーベル賞受賞者となつた彼にそ
つと眩いた。「どんな気分だい (How
does it feel?)」。そんなフォークロ
ックの旗手と言われた彼がティーン
のころ憧れていたのはかのビリー・グ
ラハム師。説教をする彼の姿にディラ
ン少年はやられたという。その後七〇
年代末には明確な新生体験をして「ス
ロー・トレイン・カミング」や「セイ
ヴド」などキリスト教色の強いアルバ
ムを発表したこともあつた。今回の授
賞理由は「新たな詩的表現の創造」だ
そう。文学者ではないディランの受
賞には戸惑いや批判があるようだが、
兎に角一昨昨日が彼にとつての栄光
の日であつたことは間違いない。

閑話休題。このセクションでイエス

は自らに与えられる栄光の時を悟り、
次に栄光の性質を詳らかにし、更に彼
の追従者にご自身の栄光にあずかる
方法を教えておられる。上記の三点を
ポイントに語りたい。

一、栄光の時を悟る

イエスが自らの生涯における「時」を測
つて行動していたことは「カナの婚礼 (二
章)」や「仮庵の祭りに行く (七章)」と
いつた箇所にも明らかであるが、ここに至
つてイエスは「人の子が栄光を受けるその時
が来ました」と宣言した。しかしイエスは
どうして「その時」を悟ることが出来たの
だろう。前後関係を見れば答えは明白
だ。数名のギリシャ語を話す外国人たち
が弟子のひとりであり、そのギリシャ風の
名前から恐らくギリシャ語が話せたであ
ろうピリポに近づきイエスに会談を申し
入れたのである。この時点でイエスの名は
一方においては祭司たちやパリサイ人た
ちに否定されていたのだが、他方でその名
声はユダヤ人社会を大きく超え、世界に
広がろうとしていた。そのことを知ったと
き、イエスは自らのメシアとしての使命を
果たす栄光の時を悟られたのである。

一、栄光の属性

だがイエスの言う栄光と私たちが考え
るそれとの間の乖離は大きい。一般に栄光
とは勝利や達成と結びつく概念だ。(例：
ゆず「栄光の架橋」)。だがどうだ。イエ
スの語つたたとえ、即ち「一粒の麦」はご
自身の犠牲の死を予表している。こういう

とある者は、「いやここの栄光とはエマオ
の途上で話されたような『苦難を通しての
栄光』を指すのではないか」というかもし
れない。しかしそれはこの福音書の筆致で
はない。それは二七節、三三節を読めば
明らかだ。ここで語られるイエスの栄光と
は恥を「通して」ではなく、恥の「ただ
中」に現されるものだ。そう、あの『金
や銀の冠』の歌のごとく、ヨハネにとつて
は荒削りの十字架こそがイエスの玉座で
あり、いばらの冠こそが、栄光の王冠なの
である。この逆説的な栄光こそ十字架の
奥義であり、人の知恵を超えたる神の愚
かさなのだ。

三、栄光にあずかる方法

このようにしてイエスは自らの刑死その
ものに神の栄光の顕現を見たのであるが、
更に進んで「わたしに仕えるというのなら、
その人はわたしについて来なさい。わたし
がいる所に、わたしに仕える者もいるべき
です。(二六節)」と言われた。これは明
確な招きである。もし人がイエスの弟子と
なりたい、その栄光にあずかりたいと思
うなら、その生き方を主イエスのごとくにせ
よという呼びかけである。つまりイエスの
栄光にあずかるには単にイエスの十字架
を信じるだけではなく、その歩みまでイエ
スに似ていくことが求められているという

ことだ。言い換えれば人がイエスの栄光に
あずかろうとするならば、その人の人生
のうちに何かしらイエスの歩みと相似形
を描くものが出来てこなければならぬ
ということである。イエスが地に落ちて死
んだ一粒の麦になつたように、私たちも我
欲と執着を捨てて仕えていく時に、たとえ
貶められ、蔑まれてもかえってそこに栄光
が現れる。それを神の栄光というのだ。

* * *

一九四五年四月九日未明、ある男の死
刑執行が始まつた。それは実に静かな執
行だつた。準備の間、彼はいつものよう
に祈つていた。いよいよ執行の時、彼は
また短い祈りをささげ、従容として十三
階段を上り、その数十秒後、一粒の麦
は地に落ちた。弱冠二四歳で大学教授資
格を得た秀才にしてナチズムの一貫か
つ徹底した反対者、亡命のチケットを捨
てて反ナチ運動に身を投じた時代の預
言者、D・ボン・ヘッファー牧師は刑場の
露と消えた。享年三九。だが彼の最期を
看取つた検視官はこういつている。「医
者として、この様に全くすべてを委ねて
死についた人を見たことはない」そして
彼の最期のことばは「これで終わりだ。
しかしこれはいのちの始まりだ」である。
神の栄光は闇の中に輝く。アーメン。